

昔むかし、コルシカ島にあるさびしい山の中に、ひとりの男の人が住んでいました。

男の人には、息子が十二人ありました。

あるとき、ひどい飢饉におそわれました。男の人は、息子たちにいいました。

「わしには、もうおまえたちに食べさせてやるパンがない。広い世界へ出て行って、自分でかせいで何とか食べていっておくれ」

すると、末っ子のフランチェスコが、泣きだしました。

「ぼくは、足が不自由なのに、どうやって食べて行けばいいんでしょう」

父親は、

「兄さんたちがおまえを助けてくれるよ。パンひと切れ手でもに入ったら、きっとおまえにも分けてくれるさ」といいました。

あくる日、十二人の兄弟は、おたがいに決して離れないと約束して、旅に出ました。ところが、二、三日すると、一番上の兄さんが、弟たちにいいました。

「小さいフランチェスコはどうもじやまだなあ。この子はここに置いていこう。きっとなさけ深い旅人でも来て、助けてくれるだろうよ」

十一人の兄さんたちは、足の不自由なフランチェスコをそこに置き去りにしました。

十一人の兄弟は、会う人ごとに食べ物をめぐんでもらいながら旅を続け、やがて海岸に着きました。そこに、ボートがつないであつたので、兄弟は、そのボートを盗んで、向かいのサルニジア島へ渡ることにしました。ところが、海の真ん中まで来たとき、ひどい嵐が巻き起こりました。ボートは岩にぶつかっただけ、十一人の兄弟はみな、海にしずんでしまいました。

いっぽう、フランチェスコは、兄さんたちに置き去りにされて、悲しみと疲れとで、眠りこんでしまいました。すると、このあたりにすんでいる妖精があらわれて、このあわれな子を救ってやろうと考えました。妖精は、フランチェスコが寝ているあいだに、まほうの草で足を治してやりました。そして、きたならしいおばあさんになって、そばの薪の山の上に腰を下ろしました。

やがて、フランチェスコは、目を覚まして、足がすっかり治っているのに気づきました。ふと見ると、そばに、きたないおばあさんが、腰を下ろして休んでいました。

「おばあさん、ひよつとして、ここをえらいお医者さまでもお通りになりましたか」と、

フランチェスコは、たずねました。

「どうしてだね、ぼうや」

「だって、ぼくが寝ているあいだに、お医者さまがぼくの足を治してくれたんだもの。お礼をいいたいんだ」

「そうかい。じつはね、わたしがそのお医者なのさ。わたしはまほうの草を持っていて、その草であんたの足をこすってあげたんだよ。それで、すぐに治ったのさ」

フランチェスコは、うれしさのあまり、何とお礼をいっていいか分かりませんでした。おばあさんの首に飛びついて、力いっぱい抱きしめました。そのとたん、おばあさんは、これいじよう考えられないほど美しい娘になりました。体じゅう、金とダイヤモンドでぴかぴか光っていました。

フランチェスコは、すっかりおどろいて、娘の足もとにひざまずきました。娘はいいました。

「お立ちなさい、フランチェスコ。わたしはこのクレノ湖の妖精です。あなたが恩知らずでないことが分かってうれしいわ。だから、願い事をふたついつてごらん。かなえてあげましょう」

フランチェスコは、ちょっと考えてから、こういいました。

「ぼくは、望んだものが何でも飛びこむふくろがほしいな」

妖精は、

「もうひとつの願いごとは何ですか」といいました。

「ぼくのいうとおりのことをしてくれる杖がほしいな」

妖精は、フランチェスコにふくろと杖を渡して、消えました。

フランチェスコは、さっそく、ふくろを試したくなりました。そこで、大きな声で、「鳥の丸焼きが、ふくろに飛びこむように！」といいました。たちまちいいにおいがして、ふくろの中に鳥の丸焼きが飛びこみました。フランチェスコは、大よろこびで、パンとワインも出しました。それから、お腹がいっぱいになると、歩きだしました。

旅を続けているうちに、ある町に着きました。フランチェスコは、お金がなかったの

で、
「十万ターラーが、ふくろに飛びこむように」といいました。そして、すてきな服を着て、りっぱな宿屋に泊まりました。

ところで、その町は、国じゅうから腕利きのかけ事師が集まる町でした。あるとき、

悪魔が若い男のすがたでやってきて、かけ事で勝つては、相手の魂を買い取りました。かけ小屋の前には、かけに負けて財産をなくし、絶望した人たちのお墓が並びました。

悪魔は、フランチェスコに目をつけました。そして、フランチェスコの所にやって来て、いいました。

「あなたはすばらしいかけ事師だと聞いています。ぜひあなたと勝負がしたい」

フランチェスコは、

「ぼくは、かけ事なんかしませんよ」とことわりました。そのとき、悪魔がちゃんと隠しておかなかったやぎの足が見えました。フランチェスコは、心の中で、

「ああ、悪魔がたずねて来たんだな。こいつはおもしろくなりそうだな」と思いました。

二、三日すると、フランチェスコは、かけ小屋に行きました。でも、かけのやり方を知らなかったので、お金をたくさん失いました。二日目も、三日目も同じでした。すると、あの悪魔が近づいて来て、

「もしお望みなら、あなたをお助けしますよ。お金を貸してあげましょう」といいました。フランチェスコは、

「ぼくの魂を買い取るつもりだな。とつとこのふくろに飛びこめ」といいました。たちまち、悪魔は、ふくろの中に飛びこんでしまいました。フランチェスコは、杖に向かって、

「さあ、ふくろを打て」といいました。杖は、ふくろの上から、バンバン打ちました。

悪魔は悲鳴をあげました。

「出してくれ！出してくれ！」

けれども、杖はいつまでも打ち続けます。

「出してくれ！死んでしまおう！」

「死ぬはずないじゃないか。おまえは悪魔なのに」と、フランチェスコは、笑いました。

三時間たつと、フランチェスコは、

「今日の分はこれで終わり」といいました。悪魔は、

「何をしたら、ここから出していただけますか」とききました。

「いいか、よく聞け。おまえのせいでかけに負けて死んでしまった人たちを生き返らせるんだ。そして、二度とそんなことをしないと誓うんだ」

「誓います！」

「それじゃあ、出てこい。でも、ぼくは、いつでもおまえをふくろにぶちこむことがで

きるって、覚えておくんだよ」

悪魔は、約束して消えました。すぐに、お墓の中から、たくさんの人があらわれました。フランチェスコは、

「ぼくは、今日、みなさんを生き返らせることができました。でも、明日になればもうできないかもしれません。だから、二度とかけ事なんかしないと誓ってくださいね」といって、みんなに千ターラーずつお金をあげました。

「さあ、家に帰って、パンのために働きなさい」

生き返った人たちは、よろこんで立ち去りました。

やがて、フランチェスコは、故郷のお父さんの所に帰ろうと思いました。

歩いてみると、ひとりの少年が、座りこんで泣いていました。

「どうしたんだい」とたずねると、少年はいいました。

「ぼくのおやじが、木から落ちて腕を折ってしまったんだ。ぼくは、町へ走って行ってお医者に来てくれって頼んだんだけど、お医者には、ぼくのうかが貧しいからって、来てくれないんだ」

「心配するな。そのお医者は何て名前だい」

「ドクター・パンクラチオ」

「そうか。ドクター・パンクラチオ、ぼくのふくろに飛びこめ」

たちまち、お医者がふくろに飛びこんできました。フランチェスコは、杖に向かって、

「打て！」といいました。すると、杖は、ふくろを打ちはじめました。お医者は悲鳴をあげました。フランチェスコは、

「ドクター・パンクラチオ、ぼくがふくろから出してやったら、この少年のお父さんを診てやると約束するかい」とききました。

「はい、はい。約束します」

フランチェスコが、ふくろから出してやると、お医者は、さっそく少年の家に行って父親の腕を診てやりました。

フランチェスコは、旅を続けました。

ようやく故郷に着くと、人びとは、まだ、ひどい飢饉に苦しんでいました。フランチェスコは、食堂を建てました。そこでは、人びとは、お金をはらわずに好きなものを食べることができました。食堂は、飢饉が終わるまで続きました。

みなさんは、フランチェスコが幸運を手に入れて幸せだったと思うかもしれません。

でも、そうではありませんでした。兄さんたちに会いたかったのです。フランチェスコは、兄さんたちをうらんでなんかいませんでした。

ある日、フランチェスコは、ふくろに向かつていいました。

「ジョバンニ、ぼくの兄さん、ぼくのふくろに飛びこめ」

すると、ふくろの中に、ぼろぼろになった骨がひと山飛びこんで来ました。

「パウロ、ぼくの兄さん、ぼくのふくろに飛びこめ」

フランチェスコが、さげぶたびに、骨の山が飛びこみました。フランチェスコは、兄さんたちが死んでしまったと分かつて、たいそう悲しみました。

やがて、お父さんが亡くなりました。フランチェスコも年をとりました。人生の最後の時間に、フランチェスコは、もう一度、あのクレノ湖の親切な妖精に会いたいと思いました。そこで、旅に出て、妖精に出会った場所に行きました。

フランチェスコは、待ちました。けれども、妖精はあらわれませんでした。

「あの人に会うまでは、決して死ぬまい」と、フランチェスコは、思いました。

やがて、死神がやって来ました。死神は、いっぽうの手に黒い旗を持ち、もういっぽうの手にはするどい鎌を持っていました。

「さて、フランチェスコよ。もうそろそろ人生にも飽きたのではないか。たくさんの山もかけ回ったし、たくさんの谷も越えただろう。そろそろ走るのをやめて、わたしといっしょに来ないか」

フランチェスコは、答えました。

「おお、死神よ。あなたに祝福あれ。たしかに、わたしは、もうじゅうぶん長いあいだ世の中を見て来た。けれども、あなたといっしょに行く前に、わたしは、自分にとって大切なひとりの女の人に、さよならをいわなければならないんだ。あと一日、命をくれ」けれども、死神は、

「もういいだろう。お祈りを唱えて、わたしについておいで」といいました。

「お願いだ、半日だけ待ってくれ」

「だめだ」

「一時間だけ」

「一秒もだめだ」

フランチェスコは、

「あなたがそんなに無慈悲ならば、わたしのふくろに飛びこんでしまえ」とさげびまし

た。死神は、あつというまにふくろの中に飛びこみました。

そのとき、クレノ湖の妖精がすがたをあらわしました。妖精は、初めて会ったときとまったく同じように若く、かがやくばかりでした。フランチェスコは、足もとにひれふしました。妖精はいいました。

「あなたは、わたしがあたえた力を、一度も間違まちがって使いませんでしたね。あなたが、ふくろと杖を良いよことにしか使わなかったので、ごほうびをあげましょう。何がほしいですか」

「あなたに会えた今、わたしには、何も望のぞむものはありません」

「でも、あなたは、将軍しょうぐんになりたいのではありませんか。それとも、王さまになりたいですか」

「いえ、わたしには、何も望むものはないのです」

「でも、あなたは、富とみがほしいかもしれない。それとも健康けんこうな体？それとも青春せいしゅんがほしくありませんか」

「いいえ、わたしは、このコルシカ島の人びとが幸せで、戦いくさや飢饉いきんで苦しまないようにということのほか、何も望むものはありません」

「では、その願いは、かなうでしょう」

妖精はそういつてすがたを消しました。

フランチェスコは、大きなたき火をたいて、しばらくのあいだ、こわばった体を暖めました。それから、死神をふくろから出してやって、ふくろと杖を火の中に投げこみましました。だれかが、悪いことに使われないようにと考えたのです。

そのとき、悪魔が、やぶのかげでくすくす笑いしました。でも、フランチェスコには、もう、その笑い声は聞こえませんでした。にわとりが、

コケコッコーと鳴きました。死神は、

「ああ、夜明けだ！」といって、フランチェスコに鎌なぎを当て、その亡骸なきがらをかかえて消えていきました。

村上郁再話

資料『世界の民話13地中海』小沢俊夫編訳／ぎょうせい